

ネルヴァルにおける罪障感と

許しと治癒の期待

篠田 知和基

ネルヴァル⁽¹⁾は周知のように統合失調症を発症し、当時有数の精神病院として知られたBlanche病院への入院をくりかえしたはてに四七歳で首をくくって死んだ⁽²⁾。その遺作『オーレリア』では「自分はなにをしたのか?」「宇宙の調和を乱した」「自分のせいだ、エウリュディケを二度失った」「いまや死ななければならぬのは私だ」⁽³⁾などくりかえし誇大妄想的な罪の意識にくるしめられる魂をえがき、自己懲罰としての死の誘惑をかたりつつ⁽⁴⁾、そこから超人的な努力をはらってたちなおるプロセスを描いている。自分の中に閉じこもるところから、書くこと、語ることによって他者への関心をとりもどし、彼の罪のために失われた宇宙秩序が回復される希望をもって巻をとじている。発症の原因もささいな過ちを誇大に感じて、生きるか死ぬかの選択をせまられたなどというように、過剰な罪障感にせめさいなまれたことによる⁽⁵⁾。そしてその罪をなん

とか償って許しを得ようとしたものが、この自己分析の書『オーレリア』だった。

その前年に書いた「シルヴィ」においてはそのような罪障感とは比較的うすく、過去と現在の交錯のなかに迷う魂のもとめるものを固定しようとしているようにみえるが、彼においては過去の思い出は必然的に罪の意識にうらうちされた苦く苦しいものであった。それをあたかもなつかしい思い出であるかのように語っているのは、自己欺瞞か、苦しい思い出をあえて楽しいものとして語って、自分でもそれがこのまじいものであるかのように自己暗示をかけるためか、いずれかであった。

思い出はすべて苦しいものであることは、物語の節々にあらわれる。どんなところに苦しい思い出の真実があるかをみていこう。

おそろしい過去の亡霊が姿を垣間見せるのは花束祭り⁽⁶⁾のためにヴァロアにもどった日の翌日、思い出の城まで時間つぶしに散策をこころみて、城をとりまく堀のまえにたつたときである。なつかしい城のはずである。森のなかの優雅な城である。そこにしかし、ふしぎな不安がきざす。「つかのまの水草の花がさいている。ごぼごぼという水の音がきこえる。羽虫がぶんぶんと唸ってとんでいる。瘴癘の気がたちのぼる。逃げなければいけない」⁽⁷⁾。

「瘴癘の気」というのはおおげさで、信じがたい。なにかの

言い換えか、漠たる不安を比喩的にかたつたものだろう。つまり水がくさってメタンガスを発生させているならともかく、水音もしていて、よんだ水ではないのはあきらかである。それにちよつとたまり水のおいが鼻についたくらいで、逃げなければならぬというのはおおげさである。問題は水草の花にある。そこまでも水草の花がさいている川にそつてあるいてきた。水の星となづけている水草である⁽⁸⁾。この「エルムノンヴィル」の章では「つかの間の花が星のようにちらばる」という言い方をするが、水と星の結びつきは同じである。そのまえから夜の駅馬車ははしっている街道の両脇にリンゴの木の花がまるで「地上の星」のように音立てて開くのを見てきた。地上の星、水の星、そしていま城のまえでおなじ水の星がひらくのを見た。パリからここへくるまで、空の星が地に降りて、執拗についてくる。それがなにかおそろしい、あるいははすれがたい思い出にむずびついているのではないかと思わせられる⁽⁹⁾。

どんな思い出だろう。むかし、その城の前で、城の娘が月光にてらされて歌うのを聞いた。それを「イグサのうえをにげまどう鬼火」、あるいは「あおざめた月の光にひらく夜の花、バラ色とブロンズの幻」⁽¹⁰⁾と表現するのである。うつくしい娘を描写するのにつかわれる表現ではない。彼はその「鬼火」あるいは「夜の花」と抱き合つて踊つた。その「鬼火」がいままた、堀の水草の花のあいだからたちのぼる。城の娘は彼とおどつた

翌年には親の意向で近くの修道院にいれられ、ほどなくしてそこで死んでいる。死んだ女がいま思い出の場所ではよみがえつてきたのである。「逃げなければならぬ」というのは、そのまほろしからであるなら当然だろう。「地上の星」あるいは「水の星」というのは地上に舞い戻つてきた死者のことではなかつたらうか。

しかし「逃げよう」といいながら彼の足は城の娘の修道院へむかつている。それはこのときではなく、そのまえにシルヴィと踊つた年のことだが⁽¹¹⁾、そのときも、一晩おどりあかした祭のあと、ロワジーへむかつて森をつつきりながら、「生暖かい、かぐわしい空気」にさそわれて、そこで露天で夜をすごすことにして草のうえで寝た。最終章では「ダマルタンではいつも聖ヨハネ館にとまる」という。ホテルに泊まるのがふつうである。なにか魔性のももの誘惑にとらえられているのでなければ、森の中で野宿をする気にはならないだろう⁽¹²⁾。翌朝、目よをさますとそこは修道院の扉の外だつたという。そのときは扉によじのぼつて中をのぞいてみようとする。娘が死んでいることはとつくに知っているのである。いかに彼がふりすてようとしながら、過去にとらえられているかがわかる。この過去のまほろしは、そのまえにもよみがえつて、彼をおびやかしていた。シャーリスの僧院でもよおされた演劇のゆうべで、修道院の修道尼たちが死んだキリストが三日間地獄をおとずれてい

たという設定のドラマを演じたのだが、そこで地獄の天使を演じていたのが彼女だった。彼はそれをすでに亡霊の回帰のようにかんじていた。その後、パリへもどった彼は、しばらくまえから接近をこころみている女優にその話をする。女優とその修道尼が似ているというのである。女優はつめたく言う。「女優と修道尼が同一人物だともいわせようとしているの？　あなたは現実をさけてドラマをもとめているんだわ。あなたのいうことなんかもう信じないわ」¹³。修道尼が修道院をぬけだして女優になっているというような話はドラマでもありえない。そもそもその当の修道女は死んでいるのである。修道院を抜け出すのではなく、地獄を抜け出さなければ、パリの劇場までやってこれない。それでも、というのが、彼のおかしなところであり、それでもおそろしい幻が城のまえにあらわれたというのが「現実」だった。そしていまパリからロワジーの祭に駅馬車でかけつけたときも、エルムノンヴィルで修道女の幻がたちあらわれそうになるのをその寸前に回避して、むかったのがロワジーである。道は前年とおなじはずである。こんども彼は修道院の扉のそとをあるいてロワジーへゆく。

同じ話を彼は幼馴染の村娘シルヴィにもする。そしてシルヴィも同じ返事をする。彼女のせりふを解釈すれば、こうなるだろう。あなたはまぼろしをおっているの。わたしは現実にいきているのよ¹⁴。

そのシルヴィにいままた再会し、パリへ行つて一緒にくらそうと口説こうとするのである。シルヴィは彼にいなづけを紹介する。「このひとと一緒になるの」。パリにもどった彼は女優にまたも接近を試みる。彼女もまた彼にある男を紹介して言う「この人が私を愛してくれているよ」。修道女と女優ではなく、女優と村娘がおなじせりふをいう。修道女はもとより無関係であり、はやく死んでいる。修道女の思い出は亡霊の思い出である。シルヴィや女優には彼女たちには責任のない修道女のまぼろしの代理になってくれとせまっけて、もちろん、相手は耳もかたむけない。そして最後に彼は言う。「おそらくそこにこそ幸せがあつたのだ¹⁵」。そこというのは、ロワジーの村娘のところである。しかし彼は彼の過ちからそのしあわせをうしなっていた。死んだ修道女の幻にとりつかれて女優やシルヴィにその代役をつとめるようにせまっけて、たんに冷たくつきはなされただけではなく、あいてに、死んだ女の生き返り？　というぞつとするような恐怖心、あるいは嫌悪心をかきたてていたのだ¹⁶。もちろんはじめからシルヴィひとりりを愛していたのだった。しかし城の女とおどったときにはシルヴィの心をおもいやる余裕もなかった。彼はシルヴィをつめたく捨てたのだ。彼女はそれをゆるささない。そしてそのことを思い知らされた彼も、その「あやまち」を過大にうけとめて、「生きるか死ぬか」とまでさわざたてる。

「シルヴィ」には「死ぬか生きるか」という場面はない。しかし『火の娘たち』集中、つぎにおさめられた「オクタヴィ」ではナポリの一夜、死神と同衾した夢を見、あわてて宿をぬけだしてヴェズヴィオにのぼる。そして青い海をみおろしながら、そこにとびこもうとした。「たつた二歩でよかった。そこは山がきりたつていて、断崖絶壁になり、青く澄んだ海が下でどろいていた。一瞬の苦しみだけだ。(…)二度、身をなげ出していた。そして二度、なんともしれない力にだきとめられていた」¹⁷⁾

そこにいたるまでの説明はあまり説得的ではない。「わたしは深い悲しみにとらえられていた。それは愛されていないという観念にほかならなかった。わたしは幸福の幻影のようなものを見た。わたしは神にあたえられた能力をすべて使い果たした。(…)愛されていないだけではなく、いつか愛されるといふ希望もない。そのときわたしは神に、私の存在の意味を問うにしようとしていた」

愛し愛されるという観念、幸福のまぼろし、それは「シルヴィ」と同じである。「シルヴィ」では死神のようなまぼろし、死んだ修道女のまぼろしにひきよせられた。「オクタヴィ」ではパリの女によく似たジプシー女と床をともした。そのあけがた、火山の爆發で目をさました。あたりがあかあかとてらしだされ、煙がたちこめていた。爆發ではなく、火口の照り返しと噴煙で

ある。音のしない、溶岩の噴出ししない「爆發」である。あえていえば、射精にいたらない交接のようなものともいえる。彼は窒息感をおぼえて目をさますのだが、そのままに性交に失敗して重苦しい感じで寝についていたのではないかと思われる。ラクリマ・クリステイという発泡酒のみすぎていた。パリの女と似ている女をパリの女だと思って抱こうとして、思い違いに気がついた。それにその部屋には女の幼い子供が寝ている。

「シルヴィ」でも、村娘と一緒にそだって、妹のように感じていた。そのために彼女を抱くことができなかつたと打ち明けていた。そのためにも女にちかづきながら、最後に「思い違いをしていた」と告白して身をひきはなす。女を愛せない症候群である。山へのぼって崖の上から海へとびこもうとおもったのは、愛されていないからではなく、愛せない身体だとおもいこんだからではないだろうか。もう二度と女を愛することができない、そう思つて海へとびこもうとしたのではないだろうか。その日、エルコラの遺跡をイギリス女とともにたずね、イシス神殿で、古代の祭式を再現してみせているうちに、「よびおこした観念の壮大さに打たれ、彼女をくどくことができなくなつた」。そして「自分は彼女にふさわしくない」¹⁸⁾とうちあける。成功を目前にしての撤退は、フロイトも分析している。性交を目前にしての撤退といつてもいい。不能をおそれる反応であり、その不安ゆえの不能であろう。そして英国女をそこへのこしてゆく。

ものがたりの最後に「シルヴィ」とおなじセリフを主人公は口にする。「おそらくそこに幸福をすててきたのだ」¹⁹⁾。

そして『オーレリア』である。

「だれもが思い出のなかに痛切な激動、運命のおそろしい打撃をもっているだろう。そのときには生きるか死ぬかどちらかをえらばなければならぬ」²⁰⁾

『オーレリア』で語り手みずから分析する夢のなかではI・9で、神秘的な都にみちびかれ、その一室で婚礼の場にたちあう。彼の恋する女、死んだオーレリアと彼の分身、オリエントの王子が婚礼をあげるのだ。その場にみちびかれた彼はスキャンダルをひきおこす。もちろん、最初の狂気の発作のときとおなじに、みんながまちがえていると思ひ込む。問題になつていのは自分のほうで、もうひとりの男ではないというのである。自己意識の混乱である。『オーレリア』の最初の場面、発作をおこして留置所にいれられていると、そこへもというけにやつてきた友人が、彼と同時に拘留されていた男をつれてそとへでてゆく。そいつじゃない、おれだ、このおれだ、とさげぶのだが、だれも耳をかたむけない。この婚礼の場も、その女と結婚するのは自分で、その男ではないとさげんだにちがいない。すると分身が先の赤くやけた鉄の棒をもつてきて彼をおどかす。そこで、「スキャンダル」をひきおこした。わめき、なき、つかみかかり、てあたりしだいに近くのものをほおりなげたりしたの

であろう。相手の、先が赤く焼けた鉄の棒は、男根であることはいうまでもなく、これについては論者たちのすべてが一致している²¹⁾。相手が男根を持つていることは、つまり主人公のほうはそれをもっていないことで、不能コンプレックスである。つぎの夢ではそれをおもいだし、夢にあらわれた女にむかつて「彼女はもどつてくるだろうか?」「ゆるしてくれるのだろうか?」というが、幻はかきけすようにみえなくなり、気がつくとなたりは岩の転がる急な斜面で、頂上に一軒の家がある。彼女がそこでまわっているといいながら、その急斜面をはいのぼる。そのうち、鐘がなるのがきこえる。「もうおそい! 彼女はうしなわれた」という声がかきこえる。彼女は彼をすくうために最後の努力をした。しかし、彼がさだめられた時刻までにまちあわせの場所にたどりつかなくつたために、すべてはうしなわれたのだ。山の上の家へたどりつけないというのも不能の夢だろう。

最後の「メモラブル」という章では、彼の恋人がどこかの宮殿でよこたわって彼をまわっている。しかしそこへいそごうと思ふ彼の馬が腰砕けになつて走れない。腰砕けになつた馬がなえてしまった男根をあらわすのはいうまでもない。ただ最後の晩は「よき土星人(サチュルナン)」というなまえの彼の友好的分身がたすけにやつてくる。そこで、この分身の馬と恋人の白馬にはさまれるようにして天がける。「たすけ」がどのようなものかわからないが、不能者の性交を健常者がたすけるのであ

ろう。三人がならんで馬を天空にはしらせているのは、地上では三人が川の字になってともにベッドにねている状態をあらわすだろう。一対一では不能におちいる。それを分身のたすけでなんとか性交にたどりつく。いずれにしても久しぶりの高揚感をあじわって天がけるところで物語はおわる。

それをたんなる不能の治療としてではなく、統合失調症からの治癒とみるなら、実際におこったことは、このヘボン・サチュルナンに助けられたのではなく、彼のほうがこの分身に「治療」をほどこしたことの効果で、彼が男性としてただけではなく、社会的人格としてもとの状態を回復したことにあたるだろう。

サチュルナンはそれまで口もきかず、目もあけず、のみくいても拒否していた。しかし彼が一緒に時間をつぶしながら歌をうたつてきかせてやっているうちに、だんだん心をひらいてきて、やがて眼をひらき、言葉を発するようになってきた。そのサチュルナンを沈黙と暗黒からひきだしてやれたことが彼に自信をあたえたことはたしかだろう。思い出の歌をうたつてきかせて、サチュルナンの自閉症を開放させたとき、彼自身のころころのわだかまりもとけていったのだろう。それが不能の治療にいたったかどうかはわからないが、『オーレリア』の最後の章の高揚感はあるか至福感にみたされている。作者はこの原稿をポケットにいれたまま首をくくって死んだが、物語の主人公は、自分もサチュルナンも治療して、同時にたましいの救いさえ手

にいれているのである⁽²²⁾。

「彼が田舎で生まれたことがわかったので、私は何時間も彼のために村の古い民謡をうたつてやった。(…)うれしいことに彼がそれを聞いている様子がみられ、いくつかの部分はあとについて歌うのだった。ある日、とうとう、一瞬のあいだだったが、彼の目があいた。ちょうど夢であられた精霊とおなじ青い目だった。ある朝、それはそのときから何日かたつてからだったが、目をおおきくひらいて、それからはもう閉じようとはしなかった。そして話もするようになった。ただとぎれとぎれではあった。わたしのことがわかると、したい言い方をし、兄弟というのだった。まだ食べようとはしなかったが、ある日、庭からもどつてくると「のどがかわいた」といった。(…)それで、いまだどこにいるんだい? とときくと、—煉獄に、と答えた²³⁾。

この種の病気になるこんな奇妙なことをおもいこむのだ。私自身、こういった奇妙な思い込みからとおくはなかったことをみとめざるをえない⁽²⁴⁾。

彼の状態がここでいうとおりであったなら治療の効果はあったとせざるをえないが、その治療をすすめたのはサチュルナンというこの同病の患者とこのコンタクトをとり、彼の病状を改善させたことがおおきいだろう。「外的社会に興味をもちだした」のだ。しばらくして退院した彼、作者が、この『オー

レリア』の原稿をもったままぐびれて死んだのは、かならずしも治療の失敗にはあたらないだろう。この病気ではいいときと悪い時が交代するのである。よくなったとおもって退院しても、まず物質的生活の保障がなく、住むところもたべるものもない状態であれば、すぐに絶望に落ち込んでふしぎではない。すくなくとも『オーレリア』の中では、「狂気」という「地獄の霊」とらえられていた病人が同病者の治療をさえ実現するまでに回復したことが描かれているのである。なにによってか？ おそらくはこの記録を「書く」ということによってであろう。

註

- (1) Gérard de Nerval, 1808-1855. フランスの詩人・小説家、一八四一年ごろ路上ではだかになってわけのわからないことをわめきまらしているところを拘束され、病院へ収容され、以後、死ぬまで入退院をくりかえす。ネルヴァルについては拙著『幻影の城―ネルヴァルの世界』思潮社、および『失われた祝祭―ネルヴァルの生涯と作品』牧神社、参照。
- (2) Nerval の「狂気」に ついては Sara Köfman, *Nerval, le charme de la répétition*, l'Age d'homme, 1979 参照。
- (3) G. de Nerval, *Oeuvres*, t. I, p. 385. «Qu'avais-je fait? J'avais trouble l'harmonie de l'univers magique... Une seconde fois perdue!... C'est moi maintenant qui dois mourir...»
- (4) 「コンコルト広場へついたとき、この身を滅ぼすことしか頭になかった」 Arrivé sur la place de la Concorde, ma pensée était de me détruire. Id. p. 397 このあとセーヌ川へむかうが、決心がつかない。シオランと話したとき、この文章がたえず頭にうかんでくると言っていたのが印象的だった。
- (5) 彼の罪はなにかということがたえず研究者によって問題とされる。現実には罪はなにもない。罰のほうはあきらかである。不能、そして女から捨てられることである。その原因は女をくどきながら最後のところのためらい、あともどりをくりかえしていたことだ。そしてそれを宇宙論的に拡大して、おおいなる神が準備した神秘的な婚姻をさまたげ、宇宙の調和を乱したという自責感をいだいていたと『オーレリア』ではよみとれる。
- (6) 花東祭は五月の春の祭で、ここでは村々の射手組合が組織する弓射競技とその後の祝勝パレード、花の女王の選出、そして夜を徹しておどりからなるもので世俗の祭だが、ネルヴァルはドルイド以来の古い宗教の祭であると言っている。
- (7) Id. p. 262. «étoile de fleurs éphémère; l'écumé bouillonne, l'insecte bruit. Il faut échapper à l'air perfide qui s'exhale...»
- (8) Id. p. 259. «La Thève bruissait à notre gauche, laissant à ses coudées des remous d'eau stagnante où s'épanouissaient les nénuphars jaunes et blancs, où éclatait comme des pâquerettes la frêle broderie des étoiles d'eau» テーヴ川の水音、流れのどよみおったところ、咲く黄色や白の水蓮、ひなぎくのような水の星がごまかな刺繍

- のようになつてくる。
- (9) 「シルヴァ」にみられる主人公の不安 (malaise) / 焦燥 (angoisse) が「時」(Heure) との競争に由来する。Jean Gaumier, *G. de Nerval, et les Filles du jeu*, Nizet, 1956 44頁。
- (10) Oeuvres, t.I, op.cit. p. 247. «le feu follet fuyant sur les jongs d'une eau morte» «fleur de la nuit éclose à la pâle clarté de la lune, fantôme rose et blond...»
- (11) いくつもの年の思い出が、意図的に錯綜して思い出される様を描かれるが、それを年代順に再構成するような試みは無駄で、すべて「続きの思い出なのである。」
- (12) つのあたりの地理にこころは Charles Samaran のほか Jacques Boulenger, *Au pays de Gérard de Nerval* 参照。
- (13) Oeuvres, t.I, op.cit. p. 271. Vous ne m'aimez pas! Vous attendez que je vous dise: «la comédienne est la même que la religieuse»; vous cherchez un drame, voilà tout, et le dévouement vous échappe. Allez je ne vous crois plus.»
- (14) 主人公にとってはシルヴィもまたまぼろしであり、アドリエンス、オーレリーとともに幻のロンドをおぼっている。これについては Giséle Séganger, *Nerval au miroir du temps*, Ellipses, 2004を参照。
- (15) Oeuvres, t.I, op.cit. p. 273. «là était le bonheur peut-être...»
- (16) もうひとつ主人公あるいは語り手は演劇に古代の秘儀のイニシエーションをみていた。「私はシンバルを飲み、太鼓を食べた」というキユベレ秘儀の秘密の言葉を演劇についていう。これについて
- 44頁参照。Gérard Freyberger, Nerval et les cultes antiques à mystères, in *Nerval, Une poétique du rêve*, Honoré Champion, 1989
- (17) Oeuvres, t.I, op.cit. p. 290. «Il n'y avait qu'un pas à faire: à l'endroit où j'étais... la mer grondait au bas... ce n'était plus qu'un moment à souffrir... Deux fois je me suis élané, et je ne sais quel pouvoir me rejeta vivant sur la terre...»
- (18) Id. p. 291. «Frapé de la grandeur des idées que nous venions de soulever, je n'osai lui parler d'amour... je lui avouai que je ne me sentais plus digne d'elle.»
- (19) Id. p. 292. «peut-être j'avais laissé là le honneur.»
- (20) Id. P. 359. «chacun peut chercher dans ses souvenirs l'émotion la plus navrante, le coup le plus terrible frappé sur l'âme par le destin; il faut alors se résoudre à mourir ou à vivre.»
- (21) Jean Richer, *Nerval, expérience et création*, Hachette, 1963 ほか。
- (22) そのようなことが作者自身の病院での経験としてあったかどうかはわからない。すくなくともそれを裏付ける証言はない。あえていえば、作品を発表してある程度の反応をえたことが自信をとりもどすきっかけになり、より社会へむかって発言していかうとさせたとは考えられる。『オーレリア』自体、自分の病状を記録して何らかの役に立てようとしたといっている。口も利かず、目もあけない病人は、彼の作品にたいして何の反応もしない読者をして見られる。読者からわすれられようとしているという思いにとらえられていた病者にとって、彼の書いたものが何ら

かの反応をよびおこしたと知ることはおおいなるはげみになったろう。彼は『東方の旅』である程度の成功をえたあとは、病院の入退院をくりかえして、創作の筆もすすまず、しばらく刊行が途絶えていた。一八五三年の『火の娘たち』はひさびさの刊行だった。「火の娘たち」、強くはげしい女たちに対して、かれが腰砕けになる物語である。それがあつた程度の成功を得たことは、その後自身を告白する小説をつづけようとおもわせたのではないだろうか。このころ彼は入退院を繰り返して、無収入であり、狂人という評判もあつて、女たちには相手にされず、性生活はなかつたとおもわれる。

(23) Oeuvres, t. I. «Et maintenant où crois-tu être? -En purgatoire.»

(24) Id. p. 413 «(...) Telles sont des idées bizarres que donnent ces sortes de maladies; je reconnus en moi-même que je n'avais pas été loin d'une si étrange persuasion.»

(しのだ・ちわき／比較文学・ヨーロッパ神話論)